アイデンティティ喪失の時代に、その本質を優しく解く

社会構成主義や感情社会学等も踏まえた上で解説が施される

桑原 司

船津 衛 著
▶自分とは何か
「自我の社会学」入門
3・10刊 四六判216頁 本体1900円
恒星社厚生閣

その表題にもあるように、本書は「自分とは何か」という問題に対して「社会学」という観点から解説・分析が施されたものである。「自分」とは、社会学において「自我」という言葉で言及されることが多いが、これは平たく言うならば〝人が自分自身について抱く自己イメージ〟のことだと理解されたい。このイメージは一枚岩のようなものではなくきわめて多層的な構成をなしており、それを著者は「タマネギ」にたとえる。幾枚もの「皮」が重なり包み込まれる形で存在しているものに他ならない。人々はこの意味での自我を生まれながらにして有しているわけではない。自我は、人々が日常生活においてその都度出会う数多くの他者たちとの交わり（社会的相互作用ないしはコミュニケーション）のなかから後天的に形成されていくものである。本書はこのような自我のありよう（自我の社会性）について、社会構成主義（社会的構築主義）や感情社会学等、近年の理論動向も踏まえた上で解説を施している。本書は全16章からなる。以下、その内容を概観していこう。

人間の自我に関する探求はフランスの哲学者R・デカルトに始まると言われるが、彼の自我観は「孤立性」を強く帯びたものであった。自我とはまず何よりも「社会性」を帯びたものであり、それは種々の他者たちとの交流から形成されるものであると理解されなければならない（第1章）。そうした自我の社会性を明らかにした社会学者の先駆けとしてC・H・クーリーが挙げられる。彼にとって人間の自我とは「鏡に映った自我」と捉えられるものであった（第2章）。自我というものを社会性を帯びたものと捉える視点は、特定の時代や地域に限定されたものではなく「古今東西」すべてにおいて見られる現象である、と著者は解く（第3章）。他者たちとの交流から自我が形成される。その「他者」には大別して「親密な他者（汝）」と「疎遠な他者（ソレ）」があり（M・ブーバー）、2種類の他者に対応して2種類の自我（「ワレ－汝」的ワレ、「ワレ－ソレ」的ワレ）が形成されうる（第4章）。他者との交流を通じた自我の形成というクーリーが提示した視点は、その後G・H・ミードによって「役割取得」という概念を通じてより精緻化される。人間は他者たちの「役割」群を取得することを通じて自我を形成するが、そうした役割群は「一般化された他者」として抽象化され内在化される（第5章）。とはいえ、内在化の対象となる役割群がいつでも互いに整合的であるとは限らない。「複数の相異なる両立不可能な期待（役割）」に直面するとき、人々（とりわけ現代人）は「役割コンフリクト」に苦しみ悩む（第7章）。人々が悩み苦しむのは何も役割コンフリクトに遭遇したときだけではない。他者たちから自分にレッテルが貼られるとき、とりわけそれが「マイナスのレッテル」であるとき、人間の自我はそのレッテルに大きく左右される（「ラベリング」理論）。とはいえ、そうしたレッテルと自己イメージとの乖離に「反発し、〈それを〉乗り越える」スキルと力が人間には備わっている（第8章）。そうしたスキルや力はもろん生来的に備わったものではなく、後天的な「表現形式の学習」を通じて獲得されるものである。この学習の後に、言葉や身振りのみならず、表情、目の動き、髪型、服装、携帯品、持ち物等を通じた自己表現が行われうる（第9章、第11章）。その展開場面に対面的な状況のみならずインターネット空間までもがふくまれる。それが現代という時代の特徴的な側面の1つであり、後者の空間にアクセスする手段として携帯電話が頻繁に利用される（第10章）。自己表現という営みは、社会学においてしばしば「印象操作」という概念のもとに分析されてきたが、近年の研究はその印象操作が「感情操作」という「深層的」な作業を伴うことを明らかにしたこと（第12章）。ミードがかつて明らかにしたように、人間の自我は「客我」と「主我」の2側面に分かれ、前者が「自我の社会性」を、後者が「人間の主体性」を表している。自我がこれら2つの側面を持つことで「創発的内省」が生じる（第16章）。この創発的内省という視点を抜きにして、人々が日常的に行っている「役割距離」や「調整」（第13章）、「役割形成」（第14章）を説明することは出来ない。近年の社会構成主義が明らかにした、言語を駆使した自我の構成・再構成という現象もまた然りである（第15章）。

最後にもう一点付け加えておきたい。それは本書が、わが国の自我論（及びシンボリック相互作用論）研究をリードしてきた著者の〝知のエッセンス〟ないしは〝船津社会学の展示室〟としても位置づけることが可能だという点である。船津社会学はその主たる特徴として、自我の社会性と主体性という2つの側面のバランスをとり理論化するかという問題意識を強く有するが、そうした著者の理論の性格は本書にも色濃く現れている。そうした著者の立場から「ポモ・ソシオロジクス」が肯定不可能な自我観であること（第6章）は言うまでもない。本書は、初学者のみならず、「自我論」「シンボリック相互作用論」といったテーマで卒業論文等を執筆予定の学士課程在学者にも是非一読頂きたい一冊である。

（鹿児島大学）

▼書物と映像の未来――グーグル化する世界の知の課題と▶長尾眞・遠藤薫・吉見俊哉編

グーグルは大きな企業ではない。しかし、グーグルが企画した図書館収蔵の書籍の全デジタル化は、長いあいだの図書館人の夢であった。どこにある書籍でも即時にどこでも読める、というサービスは、文化の平等化の究極の目標だったからである。ただ、グーグルは一広告会社であり、必然的に利益追求が目標となる。著作権の扱いをめぐって裁判所から待ったがかかり、したがって未解決だが、本書ではこの問題にも客観的な立場で解説を提供している。さらに、映像・放送まで新しい課題についても、今後起こりうる問題を先取りした解説を行っている。

電子書籍の時代が来る、と鳴り物入りで大騒ぎしたのは二〇一〇年の国際ブックフェアの頃からだった。グーグルの問題だけでなく、日本の国内では流通に関して問題が多く、また大きな動きを見せていないが、電子書籍はいずれ一つの価格帯を形成するものと想像される。

本書は市場の問題を離れて、デジタル社会の構築に向けた夢を大きくふくらませた思考を展開している。（11・2刊、B6判一八二頁・本体一五〇〇円・岩波書店）

ノンフィクション

うし、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』なども知られていたので、社会はスペインについてもっと、そして、さらに詳しい情報を求めていた。そんな時に出版されたのが1992年刊行の『スペイン・ポルトガルを知る事典』（平凡社）であった。A5判534頁である。「スペイン、ポルトガルは私たちにとってどんな国だろうか」という切り出しで「まえがき」は始まるので、いまさら何という問いかけかと思ったが、「闘牛とフラメンコはスペインのイメージとして誰しもすぐに思い出すが、これらの国をほんとうに理解しているかどうかとなると、多分心もとない」とつづく。この事典の特徴は、スペインを地理的条件からポルトガルが位置するイベリア半島の文化圏の一国としてとらえて編集していること。大航海時代を通じて拡張したイベリア世界、すなわち、新大陸と呼ばれていたラテンアメリカとスペインとのつながりも見直し、重層的なイベリア世界の視点から日本文化をふくむ世界の地域文化の異質性と共通性に理解を促したいというのが編集方針だった。同じ出版社が発行した『大百科事典』（1984年－85年）を基礎にして、さらに新規項目を加え再録の項目は改訂した「小項目主義」事典であった。スペインを「イベリア世界から逆照射する」とまえがき」で意気込んでいる。執筆者はおよそ140名で定評のある事典となった。

このたび刊行された本書はこれらの事典を浅薄したのだろうか。編集方針は鼎立する事典で語り尽くされているので、新刊書の特徴を際立たせるため立項について考えてみよう。章立てはユニークである。「スペインという国」「文化・文化現象・ファッション」「美術・芸術」「建築・彫刻」「音楽・映画」「フラメンコと闘牛」「食文化」「スポーツ・教育」「文学・メディア」「知識人・知的活動」「言語・国民アイデンティティ」「社会・政治・経済・宗教」「スペインの歴史」「世界遺産・遺跡」の14分野に分かれている。さらに42頁にわたって付録として「もっと知りたい人のための読書ガイド」が付いている。これは本書A5判860頁のあたかも別冊のような価値があり、項目別の最新の参考文献一覧表で本書のなかでひときわ光彩を放っている。読者がテーマの流れをゆっくり追って読み、一つの項目内で概観できるようにまとめているのが「大項目主義」事典で『ブリタニカ百科事典』初版本は有名である。逆に「小項目主義」事典は細かいテーマや事物ごとに網羅的に項目を立てて個別に簡潔な解説を加えたもので、『ブロックハウス百科事典』は小項目主義を徹底したことで知られている。両方針は必ずしも対立するものではないが折衷的な編集方針に従ったのが本書で、見開き2頁の「中項目主義」事典となった点は斬新だ。利点や欠点は取り上げるテーマにおける向き不向きや利用者の目的によるところが大きいことは当然であろう。編纂された事典を比較すると、私たちがこれまでにスペインへ傾けてきた好奇心の度合いや意識の変化を推察できるし、同時に執筆者の研究成果の進展もよく読みとれる。事典は併せ読みして楽しめる。読み手の姿勢に工夫が加われば、事典は50音順の小宇宙となり知識の羅針盤となる。意外な真実が隠れている読み物になるかもしれない。自分が納得する事典を座右におきたいと望むが、世に問う出版となった本書のような労作を手にとると、つくづく、読み手側も事典の繙き方を考え直してみたいと思う。

（京都外国語大学教授）

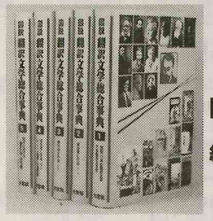
必携！ 翻訳・文学〈図説〉

明治翻訳文学全集・新聞雑誌編
川戸道昭・榊原貴教編 全50巻・別2
B5判［1996-2001］ 定価（本体763,160円＋税）

明治翻訳文学全集・翻訳家編
川戸道昭・中林良雄・榊原貴教編 全20巻
B5判［2002-03］ 定価（本体300,000円＋税）

シェイクスピア翻訳文学書全集
川戸道昭・榊原貴教編 全45巻
A5判［1999-2000］ 定価（本体362,000円＋税）

図説 翻訳文学総合事典
翻訳文学総合事典刊行会（代表 川戸道昭・榊原貴教）編
B5判［2009］ 全5巻 定価（本体120,000円＋税）



図版総点数 約3,050

図説 絵本・挿絵大事典 全3巻
川戸道昭・榊原貴教編著 B5判［2008］
定価（本体95,000円＋税）

図説 児童文学翻訳大事典 全4巻
児童文学翻訳大事典編集委員会 B5判［2007］

図書のみならず新聞・雑誌を含めた初の作家・作品別総合目録

〈過去最大〉
10万点の翻訳作品と原作にたどり着ける!

今世紀最大最高の“総合目録”

世界文学総合目録

厖大な世界文学＝翻訳文学を最も頼れる「目録」

徹底した〝現物〟確認と調査
比類なきツー

全10巻（全5回配本・予定）

□第1回配本 既刊 978-4-283-00627-0
第1巻 イギリス編①（あ～し） 00628-7
第2巻 イギリス編②（す～は） 00629-4
□第2回配本 既刊 978-4-283-00630-0
第3巻 イギリス編③（ひ～わ・補遺） 00631-7
第4巻 アメリカ編 00632-4
□第3回配本（2011年12月） 978-4-283-00633-1
第5巻 フランス編①（あ～と） 00634-8
第6巻 フランス編②（な～わ） 00635-5
□第4回配本（2012年6月） 978-4-283-00636-2
第7巻 ドイツ編 00637-9
第8巻 ロシア編 00638-6
□第5回配本（2012年12月） 978-4-283-00639-3
第9巻 北欧諸国編 00640-9
第10巻 南欧諸国・インド・中国編 00641-6

好評配本中

最充実の総合目録＋翻訳文学史事典＋図像集

各巻〈構成・内容〉
1 国・地域別編成
2 作家（原作者）の50音順配列
＊原則として小説・戯曲作家を収録し、昭和20年以前に初訳のない作家、および詩人は省く。
3 各作家の構成
略伝／明治・大正・昭和・平成の日本における作家像（代表的文献より抄出した資料集）／翻訳掲載紙誌・図書の挿絵・装幀（多数の貴重図版でたどるイメージ集）／作品別翻訳文献目録（新発見資料を多数収載。初訳の登場・各翻訳の影響関係が一目瞭然となる年代順配列）
4 解説・論考（配本／地域ごとに収録）
外国文学受容の歴史・時代背景を主要叢書などの目録を使って解説。また、専門研究者による最新の論考を多数収録。

特色
①10万点の翻訳作品を収録したかつてない規模の目録。
②新発掘資料を多く収載する最新の成果。
③翻訳作品の装幀や挿絵がみえる図像集。
④明治から平成の作家像をたどれる翻訳文学史事典。
⑤検索・古書探索に便利この上ないデータツール。

最新刊 2冊
第3巻 イギリス編③（ひ～わ・補遺）
第4巻 アメリカ編
第2回配本